論　文

菅江真澄の見聞した民俗芸能

― とりわけ祝福芸・語りものを対象としつつ ―

星　野　岳　義*

はじめに

菅江真澄の見聞した祝福芸・語りものにつき，その梗概および論点を，明らかにしてみる。本田安次は，日本の民俗芸能を分類し，この１つとして祝福芸・語りものを設定している［本田 1990: 140］。たとえば，ナマハゲは祝福芸，奥浄瑠璃は語りもの，秋田万歳は祝福芸にして語りものである，といえよう。祝福芸・語りものの演者には，諸国を放浪しながら，芸能を披露することで，糊口を得る人も少なくなかった。これは，放浪芸とも称するもので，放浪芸研究は，本田安次に師事した小沢昭一によって［本田 1993: 15］，周知されるところとなった。

いっぽう，真澄遊覧記を著した菅江真澄は，近世後期における祝福芸・語りものの様相を，丁寧に記録している。とはいえ菅江真澄は，ナマハゲや奥浄瑠璃を，個別に取り扱っているので，祝福芸・語りものという概念では括っていないと思われる。これは菅江真澄が，神楽［菅江 1973a: 173］や田楽［菅江 1974: 331］に関しては，一領域として捉えていたのに比較すると，相違といえるだろう。このため，本稿で対象とする祝福芸・語りものは，菅江真澄にとってみれば後発的な方法論に依存することに，配慮を必要とする。

そうではあれ，民俗芸能研究において普及している分類のもと，真澄遊覧記を検討するという営為も，無益ではないと考える。むしろ，真澄遊覧記にみえる神楽や田楽には，体系的考察が済んでいるのに［星野 2012b; 星野 2013］，ナマハゲや奥浄瑠璃には，受け皿となる概念がないばかりに閑却してしまうなら，有害にさえ働いているといえる。したがって，本稿では便宜上，祝福芸・語りものという領域からアプローチし，将来によりよい方策が提案されるまでの準備としたい。このように，民俗芸能の分類のもと，真澄遊覧記を通覧する試みは，いまなお完成をみない『菅江真澄全集』の索引を，裨補するものともなろう。

本稿の構成は，総説と各説の，２部からなる。まず総説では，真澄遊覧記に描かれた祝福芸・語りものの，記事を一覧にしていく。それから，先行研究を概観し，その粗密を明確にしたい。ついで，各説では，先行研究が積み残した論点を，５点ほど提起してみる。ともすると，真澄研究は，先行研究を反復するのに腐心してきたが，その轍を踏まぬようにするための手続きと

＊早稲田大学大学院社会科学研究科　修士課程２年（指導教員　内藤　明）

なる。また本稿が，将来の準備を標榜するからには，瑣細であれ新たな論点を提示するのが，本稿の責務になると考えるためでもある。

1　総　　説

1．1　真澄遊覧記にみえる祝福芸・語りもの

真澄遊覧記に描かれた祝福芸・語りものにつき，不完全ながら記事を一覧にしてみる（表）。作表にあたっては，まず行を，未来社刊『菅江真澄全集』の巻数順に，実施場所ごとに抽出する。つぎに列として，当該場所の祝福芸・語りものにまつわる語彙，当該場所の真澄遊覧記の出所，それに対する先行研究を付した。なお，渡来芸の人形まわしになるオシラサマや［菅江 1979: 874図］，アイヌの語りものになるユーカラは［菅江 1971b: 123］，別稿にて詳述する予定である。

場所の特定できるものは，文献を引用している件でも，採用することにした。すなわち，竹村吉包『田岡の清水』［菅江 1978: 359］や藤原明衡『新猿楽記』［菅江 1974: 398］は，これに当たるものとする。ゆえに反対に，琵琶法師らしき人名を挙げていても，場所を特定していなければ［菅江 1979: 285］，採用しなかった。それから，いわゆる放浪芸である場合，演者は移動しているので，厳密に場所を絞り込むのは困難といえる。この視座からすると，実施場所ごとに抽出するという本稿の指針には，将来的な見直しを留保せざるをえない。ここでは，菅江真澄が当該芸能を認知した場所を，例示として実施場所に充てることとした。

祝福芸・語りものにまつわる語彙は，原文の表記を尊重しつつも，「生身剥」をナマハゲに，「移託巫女」をイタコミコにするなど，若干の修正をくわえている。また，琵琶や梓弓など，祝福芸・語りものとの関連が推量できるものも，原則として採用した。もとより梓弓は，語りものだけに使用されるとは限らず，また菅江真澄も枕詞として提示しただけとも考えられるが，近世後期の様相を把握するうえで，なお有益になると信ずる。この指針に立脚したとき，地震が発生したさいに，「万歳楽」と唱える呪文も，採用すべきであると判断できる。一般に万歳楽といえば，渡来芸の万歳楽を想起しがちだが，地震を風刺した鯰絵には，太夫と才蔵とが描かれており［安城市歴史博物館編 1998: 24］，それゆえ万歳を意味したと知れるからである。

ところで，中山太郎『日本巫女史』では，巫女が化石になったという伝承も看過すべきでない［中山 1930: 65］，と指摘しており首肯しうる。それならば，真澄遊覧記からも，名木名石に依りついた伝承を抽出したいものの，表現上の問題を乗り越えねばならなかった。つまり，名木名石というからには，木石の名称を掲載することになるが，これら名称には，現在の観点からすると不適切な表現が含まれている。しかし，本稿には近世後期の様相を究明するという趣旨があり，かつ菅江真澄が故人となり訂正できないという現実がある。こういう事情を鑑みたとき，名称の掲載を自粛したり，名称の置き換えを多用したりすると，かえって差別意識に向き合う機会を逸しはしないだろうか。およそ，芸能という営みが，差別意識と無関係でなかったとは，多くの先行研究が証明してきた［山路 1988: 1］。本稿も，芸能研究の末端を担う以上，差別意識に理解を深め，かかる意識を解決に導くための，一里塚となることを希うも

表　真澄遊覧記にみえる祝福芸・語りもの

実施場所	祝福芸・語りものにまつわる語彙	真澄遊覧記		先行研究
		タイトル	出所	
信濃国伊那郡片桐村	女性，験者，狐が憑く	『伊那の中路』1783年４月15日条 『かたい袋』前編	菅江 1971a: 18。菅江 1974: 453	
出羽国田川郡新堀村	アズサミコ，弓を負う，綱に引かれて歩く	『秋田のかりね』1784年９月22日条	菅江 1971a: 199	佐々木 1989: 2
出羽国雄勝郡柳田村	万歳，歌声	『小野のふるさと』1785年１月７日条	菅江 1971a: 237	井上 1970: 164。佐藤 1970: 46。佐藤 1980: 11。平 2005: 41
出羽国雄勝郡湯沢村	アズサミコ，口寄せ	『小野のふるさと』1785年２月６日条	菅江 1971a: 240	
出羽国雄勝郡岩崎村	目の見えるアズサミコ，梓弓，亡き魂	『小野のふるさと』1785年３月条	菅江 1971a: 244	
出羽国雄勝郡岩崎村	万歳楽，唱える，地震	『小野のふるさと』1785年３月11日条 『筆のまにまに』３巻	菅江 1971a: 244。菅江 1974: 87	八木 2005: 245
出羽国雄勝郡杉宮村	目の見えない女性，門に立つ，ヱビスカゼ	『小野のふるさと』1785年４月８日条	菅江 1971a: 250	
陸奥国磐井郡平泉村	琵琶法師，三味線，浄瑠璃,「曽我」「八島」「尼公物語」「湯殿山の本事」「千代ほうこ」	『かすむ駒形』1786年２月６日条	菅江 1971a: 353-354	成田 1985: 14-15。石井 1987: 25。
陸奥国胆沢郡小山村（徳岡集落）	琵琶法師，目の見えない僧侶，三味線，浄瑠璃，「琵琶に磨臼」	『かすむ駒形』1786年２月21日条	菅江 1971a: 355-356	柳田 1928a: 61-62。野村 1976: 121-122。成田 1985: 16。石井 1987: 25。佐々木 1989: 6。小堀 2010: 31
陸奥国胆沢郡小山村（徳岡集落）	琵琶法師，正保	『はしわの若葉』1786年５月９日条 『雪の胆沢辺』1786年10月30日条 『岩手の山』1788年６月条	菅江 1971a: 386, 413, 425	柳田 1928a: 60
陸奥国江刺郡黒石村	目の見えない僧侶，三味線，「尼公物語」	『はしわの若葉』1786年５月10日条	菅江 1971a: 388	石井 1987: 24。石井 1988: 18。佐々木 1989: 6
陸奥国胆沢郡前沢村	験者，モノノケが憑く，ミチキリ	『雪の胆沢辺』1786年閏10月３日条	菅江 1971a; 414	
陸奥国岩手郡盛岡城下（南部藩領）	イタコ，目の見えない男女，門に立つ，歌う，ヱビスカゼ，調伏	『岩手の山』1788年６月28日条 『かたい袋』前篇	菅江 1971a: 437。菅江 1974: 458	佐々木 1989: 6
陸奥国岩手郡盛岡城下	わざおぎ，袁迩奇治，語り	『岩手の山』1788年６月28日条	菅江 1971a: 437	佐々木 1989: 8
相沼内村（西在江差付村々）	隠れザトウ	『えみしのさへき』1789年５月17日条	菅江 1971b: 51	
松前城下（松前城内）	わざおぎ，沢田某，万歳，歌う	『千島の磯』1792年１月５日条	菅江 1971b: 175	柳田 1928a: 46
松前城下	梓弓	『千島の磯』1792年３月13日条	菅江 1971b: 222	
陸奥国北郡田名部村	万歳楽，唱える，地震	『牧の冬枯』1792年12月28日条 『筆のまにまに』３巻	菅江 1971b: 303。菅江 1974: 87	
陸奥国北郡宿野部村付近	メクラ川	『奥のうらうら』1793年５月１日条	菅江 1971b: 328	
陸奥国津軽郡矢沢村（正八幡宮）	梓弓	『津軽の奥』1795年11月24日条	菅江 1972: 47	
陸奥国津軽郡弘前城下	梓弓	『津軽の奥』1796年２月25日条	菅江 1972: 61	

陸奥国津軽郡相沢村 （薦槌山）	ザトウ石，イタコ石，牛石，鸚鵡石	『すみかの山』1796年５月12日条 『錦の浜』1797年７月３日条	菅江 1972: 111，274	佐々木 1989: 6
陸奥国津軽郡早瀬野村	イタコミコ	『すみかの山』1796年５月19日条	菅江 1972: 118	佐々木 1983: 20
陸奥国津軽郡白沢村 （馬頭観音堂）	イタコミコ	『雪のもろ滝』1796年10月28日条	菅江 1972: 199	
陸奥国津軽郡岩崎村付近	メクラ坂	『雪の道奥雪の出羽路』1801年11月５日条	菅江 1972: 298	
出羽国山本郡荷上場村 （高岩神社）	イタコミコ，弓を引く	『しげき山本』1802年３月10日条	菅江 1972: 326	
出羽国秋田郡上野村 （大日堂）	琵琶	『雪の秋田根』1802年12月16日条	菅江 1972: 362，516図	
出羽国秋田郡十二所町	イタコミコ	『すすきのいでゆ』1803年１月17日条	菅江 1972: 376	
出羽国秋田郡独鈷村付近	イタコミコ，目の見えない，唱える，エビスカゼ	『にえのしがらみ』1803年６月１日条	菅江 1972: 408	
出羽国秋田郡姥沢村	メクラ平，目倉平	『にえのしがらみ』1803年６月22日条 『しののはぐさ』	菅江 1972: 421-422。菅江 1974: 319	
出羽国秋田郡出川村	イタコミコ，弓を打つ，神懸り，ワラハヤミ	『みかべのよろひ』1805年７月10日条	菅江 1973a: 49	
出羽国秋田郡阿仁	琵琶法師，七段坂	『みかべのよろひ』1805年９月７日条	菅江 1973a: 66	佐々木 1989: 6
出羽国秋田郡真坂村 （三倉鼻）	メクラ岬，三倉崎	『かすむ月星』1806年３月16日条 『雪の出羽路』平鹿郡３ 『雪の出羽路』平鹿郡４	菅江 1973a: 667図。菅江 1976: 111，170	
出羽国秋田郡谷地中村	万歳，歌う，鼓を打つ	『氷魚の村君』1810年１月８日	菅江 1973a: 189	井上 1970: 164。佐藤 1970: 46。平 2005: 41
出羽国秋田郡真山村 （光飯寺遍照院）	イタコ杉，犬子石	『男鹿の春風』1810年４月７日条	菅江 1973a: 208	
出羽国秋田郡宮沢村	ナマハゲ，童，仮面，角，肩蓑，小刀，小筥，逃げ隠れる	『男鹿の島風』1810年７月17条 『男鹿の寒風』1811年１月15日条 『筆のまにまに』８巻	菅江 1973a: 243，260，916図。菅江 1974: 237	柳田 1928a: 58。折口 1931: 4。折口 1934: 2。小松 1989: 209-211。赤坂 1996: 4-5。鎌田 1999: 23
出羽国雄勝郡外堀村 （由須留宜寒泉）	梓弓	『雪の出羽路』雄勝郡１	菅江 1975: 37	
出羽国雄勝郡畠等村	狐のなす業，加持	『雪の出羽路』雄勝郡２	菅江 1975: 141	
出羽国雄勝郡杉宮村	若子屋敷，託宣屋敷	『雪の出羽路』雄勝郡３	菅江 1975: 188	
出羽国雄勝郡赤袴村	神女，神懸り	『雪の出羽路』雄勝郡５	菅江 1975: 252	
出羽国平鹿郡角間川村	旭のミコ，旭塚，神女屋敷	『雪の出羽路』平鹿郡１	菅江 1976: 17，19	
出羽国平鹿郡沼館村	琵琶の首	『雪の出羽路』平鹿郡２	菅江 1976: 40	
出羽国平鹿郡西石塚村	朝日の松，加持，験者	『雪の出羽路』平鹿郡３	菅江 1976: 84	
出羽国平鹿郡猿田村	アズサミコ，女性，狐が憑く，占問う	『雪の出羽路』平鹿郡３	菅江 1976: 106	
出羽国平鹿郡上溝村	メクラ塚，御座処	『雪の出羽路』平鹿郡３ 『雪の出羽路』平鹿郡４	菅江 1976: 111，170	
出羽国鹿角郡古川村付近	メクラ山，神倉山	『雪の出羽路』平鹿郡３ 『雪の出羽路』平鹿郡４	菅江 1976: 111，170	
出羽国平鹿郡八沢木村	琵琶流し，琵琶石	『雪の出羽路』平鹿郡４	菅江 1976: 171，313図	
出羽国平鹿郡下八丁村 （白山姫社）	神懸り	『雪の出羽路』平鹿郡７	菅江 1976: 275	
出羽国平鹿郡浅舞村 （不動尊）	ミコ，神懸り，梓弓を引く	『雪の出羽路』平鹿郡８	菅江 1976: 285	

出羽国平鹿郡下鍋倉村	託宣塚	『雪の出羽路』平鹿郡８	菅江 1976: 305	
出羽国平鹿郡中吉田村	旭塚，旭のミコ，イタコミコ	『雪の出羽路』平鹿郡８	菅江 1976: 310	佐々木 1989: 7
出羽国平鹿郡植田村（八幡社）	神懸り	『雪の出羽路』平鹿郡９	菅江 1976: 319	
三河国	大江定基，万歳，千秋万歳，鳥追い，謡曲	『雪の出羽路』平鹿郡10『月の出羽路』仙北郡５『比良加の美多可』	菅江 1976: 345。菅江 1978: 181。菅江 1979: 446	
出羽国平鹿郡天神町村	神懸り	『雪の出羽路』平鹿郡12	菅江 1976: 468	
三河国碧海郡矢作村	浄瑠璃，浄瑠璃姫，浄瑠璃淵	『雪の出羽路』平鹿郡12『月の出羽路』仙北郡21『筆のまにまに』４巻『筆のまま』	菅江 1976: 493。菅江 1979: 880図。菅江 1974: 113。菅江 1980: 368-370	磯沼 1998: 116。小堀 2010: 61
出羽国平鹿郡大松川村（御嶽山）	千秋万歳，唱える	『雪の出羽路』平鹿郡13	菅江 1976: 539	
出羽国平鹿郡横手城下（明江山華厳院）	神女屋敷	『雪の出羽路』平鹿郡13	菅江 1976: 540	
出羽国仙北郡上淀川村	旭塚，旭坂，旭のミコ	『月の出羽路』仙北郡１	菅江 1978: 36	
出羽国仙北郡峯吉川村（白滝明神）	村民，神懸り	『月の出羽路』仙北郡２	菅江 1978: 79-80	
出羽国仙北郡明光沢村（不動明王）	目の見えない人，祀る	『月の出羽路』仙北郡２下	菅江 1978: 122	
出羽国仙北郡北楢岡村（竜江山南翁寺）	シロミコ，ザトウ，高都，菊都，梓弓	『月の出羽路』仙北郡４	菅江 1978: 144	
出羽国仙北郡石仏村（石神社）	ミコ，梓弓，伏石	『月の出羽路』仙北郡４	菅江 1978: 161	
出羽国仙北郡外小友村（若木山明神）	神懸り	『月の出羽路』仙北郡４	菅江 1978: 173	
出羽国仙北郡稲沢村	目の見えない人，若都	『月の出羽路』仙北郡５『月の出羽路』仙北郡７	菅江 1978: 191，248	
出羽国仙北郡神宮寺村（竜光明神）	ミコ，神懸り，託宣	『月の出羽路』仙北郡５	菅江 1978: 200	
出羽国仙北郡高関下郷村	梓弓	『月の出羽路』仙北郡７	菅江 1978: 662図	
出羽国仙北郡大曲西根村（安祢子稲荷明神）	神懸り	『月の出羽路』仙北郡７	菅江 1978: 265	
出羽国仙北郡寺山村（余目稲荷明神社）	ミコ，神懸り，託宣	『月の出羽路』仙北郡８	菅江 1978: 277-278	
出羽国仙北郡大曲村（栄木神明宮）	ミコ，神懸り	『月の出羽路』仙北郡９	菅江 1978: 309-310	
出羽国（秋田藩領）	目の見えない人，綱に引かれて歩く，早物語	『月の出羽路』仙北郡10『ひなの一ふし』『無題雑葉集』	菅江 1978: 336。菅江 1973b: 342-345。菅江 1981: 85図	石井 1987: 24。石井 1988: 19
出羽国仙北郡今泉村（稲生大明神社）	アズサミコ，梓弓を引く	『月の出羽路』仙北郡10	菅江 1978: 341	
出羽国仙北郡六郷本館村（田岡稲荷）	神懸り，白狐	『月の出羽路』仙北郡11	菅江 1978: 359，366，737図	
出羽国仙北郡六郷高野村（諏訪神社）	旭のミコ	『月の出羽路』仙北郡16	菅江 1979: 12-13	
出羽国仙北郡金沢中野村（十二所権現社）	陰陽博士，目の見えない女性，占問う	『月の出羽路』仙北郡17	菅江 1979: 38	佐々木 1989: 6
出羽国仙北郡飯詰村	メクラ森	『月の出羽路』仙北郡17	菅江 1979: 47	
出羽国仙北郡千屋村	ザトウ	『月の出羽路』仙北郡20	菅江 1979: 126	
出羽国秋田郡羽黒崎村	琵琶法師，琵琶沼，琵琶を流す	『花の出羽路』秋田郡『桜がり』下巻	菅江 1979: 352。菅江 1974: 287	
出羽国秋田郡添川村	狐が憑く	『花の出羽路』秋田郡	菅江 1979: 363	
出羽国秋田郡萱草村	目の見えない医師，上杉武都	『花の出羽路』秋田郡『久保田の落穂』『混雑当座右日鈔』裏書	菅江 1979: 380。菅江 1974: 399。菅江 1981: 135	
出羽国河辺郡豊巻村	神子渓	『月の出羽路』河辺郡	菅江 1979: 397	
出羽国河辺郡三内村（岩谷山福王寺）	神子石	『月の出羽路』河辺郡	菅江 1979: 402	

近江国滋賀郡上坂本村 （日吉大社）	託宣	『花の出羽路』山本郡	菅江 1979: 417	
陸奥国遠田郡大沢村	目の見えない人	『粉本稿』	菅江 1973b: 29図	
尾張国愛知郡名古屋城下	琵琶法師，藤雄，花井臼	『百臼の図』	菅江 1973b: 173	長沢 1972: 4
出羽国秋田郡久保田城下	睦月の祝い，コウロギ	『ひなの一ふし』 『無題雑葉集』	菅江 1973b: 317。 菅江 1981: 84図	森山1997: 9-23
山城国葛野郡 （平安京）	千秋万歳	『筆のまにまに』1巻 『久保田の落穂』	菅江 1974: 22，398	
三河国碧海郡東別所村 （三河万歳）	万歳，千秋万歳，奴万歳，鶴太夫，亀太夫，才蔵	『筆のまにまに』1巻 『桜がり』下巻 『久保田の落穂』	菅江 1974: 23，285，376	佐藤 1970: 46。佐藤 1980: 11。田口 1994: 62
出羽国秋田郡久保田城下 （秋田万歳）	万歳，千秋万歳，早歌，針生清太夫，「表六番」「家建万歳」「経文万歳」「神力万歳」「峰入万歳」「御国万歳」「双六万歳」「裡六番」「扇万歳」「お江戸万歳」「門跡万歳」「吉原万歳」「さくら万歳」「名寄万歳」	『筆のまにまに』1巻，4巻 『久保田の落穂』 『笹の屋日記』1823年1月4日条	菅江 1974: 23，112，376，430	井上 1970: 164。佐藤 1970: 46。佐藤 1980: 11。斎藤 1988: 42。田口 1994: 62。松山 2001: 1。平 2005: 41
出羽国秋田郡保戸野村 （東清寺）	松岡武太夫，三須田左太夫，猿子の舞	『筆のまにまに』1巻	菅江 1974: 23	
紀伊国海部郡加太浦 （淡島神社）	イチコ，口寄せ，アガタミコ，陰陽博士，占問う	『筆のまにまに』4巻	菅江 1974: 103	
三河国加茂郡寺部村	三線浄瑠璃，浄瑠璃太夫，説経	『筆のまにまに』4巻	菅江 1974: 112	
三河国加茂郡上野山村	三線浄瑠璃，説経，歌う	『筆のまにまに』4巻 『しののはぐさ』	菅江 1974: 112，331-332	
三河国加茂郡渋川村	三線浄瑠璃，説経，歌う	『筆のまにまに』4巻 『しののはぐさ』	菅江 1974: 112，331-332	
三河国額田郡明大寺村 （成就院）	浄瑠璃姫	『筆のまにまに』4巻	菅江 1974: 113	新行 1982: 43。磯沼 1998: 120。小堀 2010: 61
三河国設楽郡門谷村 （煙巌山鳳来寺）	浄瑠璃姫，浄瑠璃御前	『筆のまにまに』4巻	菅江 1974: 113	小堀 2010: 61
出羽国秋田郡谷地町 （座当神社）	花都，ザトウ塚，ザトウ桜，雨零桜	『筆のまにまに』4巻 『桜がり』下巻	菅江 1974: 122-124，283-285	
尾張国愛知郡名古屋城下	琵琶，平家語る，裂帛，有明	『筆のまにまに』6巻	菅江 1974: 158-166	長沢 1972: 4
出羽国秋田郡別所村	アズサミコ	『桜がり』下巻	菅江 1974: 286	
出羽国秋田郡久保田城下	琵琶法師，福田清都，知良都，平家語る	『久保田の落穂』 『筆の山口』 『混雑当座右日鈔』裏書	菅江 1974: 387-388。 菅江 1980: 473。菅江 1981: 136	石井 1987: 26-27
陸奥国 （仙台藩領）	ザトウ，アズサミコ，口寄せ	『かたい袋』前篇	菅江 1974: 458	
出羽国置賜郡米沢城下	ザトウ	『椎の葉』	菅江 1980: 254	
伊勢国多気郡荒蒔村	福田清都，知良都	『混雑当座右日鈔』	菅江 1980: 309	
陸奥国栗原郡梨崎村 （神通山妙用寺）	琵琶，捨てる	『かすむ駒形続』1786年3月3日	菅江 1981: 25	
出羽国秋田郡寺内村 （小林山西来院）	目の見えない僧侶	断簡56号	菅江 1981: 164	

のである。なお，後述するように菅江真澄自身は，こうした名称を転訛によるとし，先入観の払拭に努めていた旨，付言しておきたい。

１．２　先行研究の傾向

祝福芸・語りもの研究につき，菅江真澄がそうであったように，近代以降の研究者も，祝福芸・語りものという範疇からはアプローチしにくかった。ここでは，真澄遊覧記を素材にした，祝福芸・語りもの研究から，３点ほど選り取って，例示的に進捗状況を把握しておく。

まず，奥浄瑠璃やその語り手についてである。ふるくは柳田国男が，岡書院刊『雪国の春』に書き下ろした，「真澄遊覧記を読む」で奥浄瑠璃を取り上げている［柳田 1928a: 60-62］。成田守は，奥浄瑠璃の場面のうち，『かすむ駒形』の改装以前と改装以後とを比較して，真澄遊覧記の信頼性を問い直しており［成田 1985: 15］，きわめて興味深い。また，石井正己論文は，早物語を論攷するなかで，真澄遊覧記やそれ以外の文献を提示しており，真澄遊覧記の位置を知るうえで有益といえる［石井 1988: 19］。

つぎに，ナマハゲについてである。真澄遊覧記にみえる民俗芸能は，真澄研究を主導した柳田国男は多用し，いっぽう芸能史を主導した折口信夫は多用しない，という傾向にあった。かかる状況で，折口信夫が真澄遊覧記に論及した，数少ない業績が［折口 1931: 4］，「春来る鬼」つまりナマハゲであるといえる。ナマハゲは，現在では研究成果が蓄積し，また人口にも膾炙されているが，その一契機を真澄遊覧記に求めることができよう。

さいごに，三河万歳と秋田万歳との，関係についてである。菅江真澄は，『筆のまにまに』１巻のうち「千寿万歳」で，「……伝えうつりて三河ぶりとは大にことなれり……」［菅江 1974: 23］と指摘した。いっぽう，いわゆる諸国風俗問状に対する，秋田藩の回答である『風俗問状答』では，「古来よりの文段にして，改め作ることなし」［那珂 1969: 496］と指摘している。いずれの見解も，三河万歳が常陸国経由で秋田万歳になった，と説くところに共通点がある。近代に入ると，石井忠行『伊頭園茶話』16巻は『筆のまにまに』を抜粋し［石井 1875: 75］，近藤源八『羽陰温故誌』25冊は『風俗問状答』を抜粋している［近藤 1978: 145］。さらに小玉暁村は，江戸万歳が秋田万歳になったと説き［小玉 1934: 564］，これを承けた佐藤久治は，江戸万歳と尾張万歳と秋田万歳独自のものとを再編成したと説いた［佐藤 1980: 14］。近年の学説も，秋田万歳は，さまざまな要素が複合している，という観点に立っているようである［平 2005: 46］。とまれ，真澄遊覧記が時代を超えて，検討の対象になり続けた，稀有な事例といえる。

上掲が，祝福芸・語りものに含まれる芸能の，主要な研究成果といえる。論文は，先行研究を焼き直すためだけにあるのではないから，本稿では，上掲以外の論点を探し出したい。なお，祝福芸・語りものに向き合うとき，中山太郎の主著である，『日本巫女史』『日本盲人史』は等閑視しがたいが，そこでは真澄遊覧記を多用していない。この事実は真澄遊覧記をめぐる，柳田国男に対する折口信夫の姿勢を考えるうえでも，意味ある一致となろう。

2　各　　説

2．1　語りもの起源論

菅江真澄は，その出自を曖昧にしているものの，三河国に所縁があったらしいとは，真澄遊覧記から垣間見える通りである［新行 1982: 43］。このうち，浄瑠璃という語りものが，源義経と浄瑠璃姫との悲恋に発する［菅江 1974: 113］，と記述したことが先学により注目されてきた。浄瑠璃の起源については，諸説あるにもかかわらず［高野 1926: 608-610］，三河国に所縁のある浄瑠璃姫譚を特記したところに，菅江真澄の個性が顕われているといえよう。

これにより民俗芸能には，ある演目の由緒を伝えるほかに，より上位概念たる芸能そのものの由緒を伝えるものも，存在すると再認識できる。真澄遊覧記を読み解くと，浄瑠璃以外にも，こうした芸能そのものの由緒を説いている例証が，探し出せると気づく。すでに浄瑠璃に関しては，先行研究が積み上げられ［新行 1982: 43; 小堀 2010: 61］，知名度も高くなっているから，ここでは浄瑠璃以外から２点ほど検討に供したい。まずは，琵琶法師にまつわる記述を，『月の出羽路』仙北郡24から引用したい。

摂州勝尾寺の荒神，和州笠の荒神などは，我国にて釈氏の感得の神也といへり。中世以来盲人琵琶を鼓て，地神経を誦して祭る説あり，仏説地神経一巻あり，卑俗の文字にして蔵書の目になき所なりといへり。［菅江 1979: 231］

荒神経や地神経の読誦を，いわゆる琵琶法師が担ったというもので，類する趣旨が，『風の落葉』３［菅江 1980: 111］にも収録されている。いずれも，出所が明示されており，谷川士清『和訓栞』であるという。小野功竜論文によると，地神経を誦するのは，平家物語を語るよりも先行するとしたうえで，前者には呪的巫的能力が託されていたとする［小野 1975: 31］。管見のところ真澄遊覧記には，地神経と平家物語との前後関係などについて，言及した様子は見受けられない。ただ，明光明神が妙音講の転訛である［菅江 1978: 123］，と指摘するなかで，妙音講に対する知識が窺えるばかりである。

つぎに，万歳にまつわる記述を，『比良可の美多可』から引用したい。

こは寂照上人とて謡曲にも作りて，あまねう世に知られる人也。また，歳の始の万歳も万歳楽に准らへ，鳥追の唱歌をも国栖歌になずらへて唄はせ給ふ。万歳も，鳥追のべろべろ唄も定基卿の作也。［菅江 1979: 446］

万歳や鳥追いが，大江定基の創作によるというもので，類する趣旨が，『月の出羽路』仙北郡５［菅江 1978: 181］にも収録されている。いずれも，出所が明示されておらず，真澄遊覧記の種本を確定することはできない。もっとも，菊岡沾凉『本朝世事談綺』巻４でも，万歳と大江定基とを結びつけて理解しており［菊岡 1974: 497］，菅江真澄の時代には，珍しくない巷説であったと分かる。以上を概観してみて，芸能そのものの由緒というのが，ある演目の由緒を検討するのと，どういった差違があるといえるだろうか。また，祝福芸・語りものから得られた解釈を，他の芸能そのものの由緒，たとえば神楽や田楽にも応用できるのか，検討すべき問題は少なくない。

２．２　琵琶法師の領分

菅江真澄は，その出自を曖昧にしているものの，尾張国に所縁があったらしいとは，真澄遊覧記から垣間見える通りである［新行 1982: 45］。実際に真澄遊覧記には，花井臼と琵琶法師との出会いとか［菅江 1973b: 173］，古物屋に陳列されていた琵琶とか［菅江 1974: 159］，といった尾張国時代の出来事が収録されている。もっとも，尾張国時代の概要は，長沢詠子論文にまとめられているので［長沢 1972: 4］，無用の重複は避けたい。本稿では，以上を念頭に置きながら，菅江真澄の琵琶法師らに対する，出立した以後の視線を，対象にしてみたい。

それにあたり，『雪の出羽路』平鹿郡３を引用してみる。

> めくら塚は，多くの盲瞽を埋みし塚と云ひしはそらごと也，保呂（羽＝脱）山へ御神幸の神輿をすゑ奉りし処にて御座処也。其形の塚如なれば，そをみくら塚とはいへる也。秋田ノ郡琴ノ海…の岸にもめくら岬也，本ト三倉崎也。南部ノ鹿角…にも又神倉山あり，里人めくら山といふ，この山に三柱の神ませり。御倉，盲人，訛安き語なればしかいへる也。［菅江 1976: 111］

菅江真澄は，各地を遊歴するなかで，特定の名称をもつ場所に，人身御供の伝承があると気づいたらしい。こうした場所は，標山にも似た役割があり，それゆえ人身御供にちなむ地名は転訛である，と菅江真澄は主張した。類する趣旨は，『雪の出羽路』平鹿郡４［菅江 1976: 170］にも収録されている。もっとも，目の見えない女性にまつわる，人身御供の伝承が，真澄遊覧記に皆無なわけではない［菅江 1979: 38］。したがって，菅江真澄の叙述態度から学ぶべきは，まず事実の報告をして，さらに異議があれば提案する，という手順を踏んでいる点だろう。これにより真澄遊覧記の読者は，菅江真澄の判断を遡及して，その是非を確認できるのである。

それならば，特定の名称をもつ場所を，先哲はどう捉えてきたのか。たとえば中山太郎は，「座頭池」「琵琶淵」にまつわる伝承が，人身御供を意味しているのではないか［中山 1934: 242］，との見解を述べている。柳田国男は，「何コロゲ」「何コロバシ」という名所につき，目の見えない人であっても，そうは転落しなかったろう［柳田 1928b: 12］，との見解を述べている。後者は，伝承が改造されたり忘却されたりする，という文脈のもと例示したに過ぎないが，看過しがたい解釈であることに相違はない。

ほかにも，菅江真澄は，数多くの琵琶法師らに紙幅を割いている。清都のごとき優秀な琵琶法師のみならず，花都のごとき滑稽な琵琶法師も，紹介していた。すなわち，雨零桜の伝承とは，花都という琵琶法師が，１斗の餅を食べ切る，という賭けに敗北して，首を刎ねられたものである。餅に僧侶という題材は，佐々木喜善『聴耳草紙』141番［佐々木 1986: 549］を把握していれば，奥羽地方に流布した昔話なのだ，と対処できよう。ただ，菅江真澄の関心は，賭けに敗北しても物怖じしない，花都の人柄にあったらしい。そう推察しうるのは，たびたび花都を紹介したのみならず，戸部正直『奥羽永慶軍記』巻37にみえる類話を，『椎の葉』に転載したためでもある［菅江 1980: 254］。

２．３　神懸りまたは梓弓

梓弓を携えたイタコミコによって，ワラハヤ

ミなどの罹患者が，恢復に導かれるという話柄は，真澄遊覧記に散見するものである［菅江 1972: 326; 菅江 1973a: 49］。かかる記述のうち，とりわけ日記に関しては，『民俗資料選集』15において，抜粋が試みられてきた［文化庁文化財保護部編 1986: 47-51］。翻って言えば，真澄遊覧記のなかの日記以外に対しては，イタコミコの活躍が，未整理に近い状態にあるといえる。たとえば，『かたい袋』前篇は，より周知されてしかるべき一節と思われる。

……坐頭の房の女房は眼見えざる女にて，凡梓巫女なり。かかるわざの女もかみんといふ。又わかとも，口よせともいへり。南部にて此女房をもはら板子といへり。［菅江 1974: 458］

陸奥国のイタコミコのうち，仙台藩領と南部藩領との相違を説いたもので，菅江真澄の比較する眼差しが発揮されているといえよう。目の見えない者同士で夫婦になる，という慣習は，はやく中山太郎も指摘していて［中山 1930: 440］，そうした一例として注意しうる。イタコミコに関する記述は，随筆のみならず地誌にも見受けられ，その大略は一覧表に掲出した通りである。以下では，地誌を繙読することで，イタコミコの神懸りから，いかなる性質が読み取れるか，ある種のパターンを析出したい。まずは，『雪の出羽路』平鹿郡８のうち，出羽国平鹿郡浅舞村の，不動尊の縁起を紹介してみる。

……あな邪魔なる石仏也とて八幡川へづふりと投込ミたりしかば，此者に祟てさまさま狂へば，神子に梓ひかすれば，不動明王を川にしづめ奉りし神罰なりといふを聞て……［菅江 1976: 284-285］

この例証を抽象化すると，２度に分けて神意が提示されているので，ここでは二段階意思説と仮称しておく。すなわち第一段階として，原因不明の症状が，一村民に現れるという事実がある。第二段階として，イタコミコの託宣により，症状の原因が説示される，という手順になる。この二段階意思説において，神意を痛感したのは一村民であって，イタコミコは解説者に徹しているのが，特徴である。換言するとイタコミコは，既存の不安感を緩和するための，受動的な装置となっており，これは陰陽師の役割にも言いうる。二段階意思説には，ほかにも『月の出羽路』仙北郡４［菅江 1978: 161］を挙げることができる。

ついで，『月の出羽路』仙北郡10のうち，出羽国仙北郡今泉村の，稲生大明神社の縁起を紹介してみる。

……梓巫女弓弦を叩て，年ふり奉る稲荷明神の神社ありしが，いつとなうこぼれはてたるを恐ともえしらで家たり。是いとはや興し建べしといへり。［菅江 1978: 341］

この例証を抽象化すると，１度で神意が提示されているので，ここでは一段階意思説と仮称しておく。イタコミコの託宣により，何らかの行為が実現することから，換言するとイタコミコは，能動的な装置であるといえよう。かかる託宣は，神懸りの所産というほかに，布教の拡充のごとき，宗教団体の意嚮が働いていたとも考えられる。一段階意思説には，ほかにも『雪の出羽路』平鹿郡12［菅江 1976: 468］を挙げることができる。なお一般に，イタコミコから連想するのは，死霊を呼び寄せる場面だろうが，ほとんど真澄遊覧記に描写がないため，こ

こでは検証しえなかった。

以上のように，イタコミコの神懸りを整理すると，神懸りをともなう他の芸能，なかんずく神楽との，類似点が気になるところである。たとえば，周防国玖珂郡釜ケ原村の釜ケ原神楽には，「天大将軍」なる神懸りが存在する［三村 2003: 24］。この，いわゆる「将軍舞」は，地域により芸態が異なるが，弓に矢を番えたり，右回り左回りに旋回したりする傾向は認められる。いっぽうイタコミコは，梓弓を採物としており，弦を弾いて霊魂を呼び寄せるのは，多くの採訪が明らかにしてきた［小沢 1974: 64］。のみならずイタコミコは，弓に矢を番えて，放つような構えをした，という報告もみえる［文化庁文化財保護部編 1993: 111］。イタコミコが旋回したか定かでないが，旋回を得意としたのが巫女神楽であることは，斟酌してよいと思われる。

そうではあれ，これら類似点を模索していくには，判断材料が不足している。すでに「将軍舞」は，周防国はもちろん，伊予国［高木 1985: 32］や肥前国［渡辺 1988: 323］などで確認されてきた。このため，主として西日本に分布する，とみるのが穏当になるはずだが，甲斐国にも「四道将軍弓矢」なる演目があるらしい［三田村 2005: 148］。また，真澄遊覧記に即すると，湯立神楽の「湯立」は，「矢立」と混同していると提唱するものの［菅江 1974: 250］，その根拠までは明記していない。いずれにせよ，採物としての弓矢が，代替不能なほど象徴性を帯びている，という暗示が得られるとすれば，それのみで収穫とはいえないだろうか。

２．４　秋田万歳の画証的考察

菅江真澄は，人物画を不得手としたらしい［内田 1970: 243］，と内田武志は看破している。祝福芸・語りものでいえば，ナマハゲは描いたけれど［菅江 1973a: 916図］，秋田万歳は描いていない。秋田万歳の扮装は，『筆のまにまに』１巻において，文章化しているのみである。

烏帽子に松竹鶴亀の紋ある水干を着て，才蔵は広袖厚綿入を着て浅黄のちよつへい頭巾によそひたちぬ。［菅江 1974: 23］

的確な表現といえるが，そうではあれ図示したほうが，より情報量が増すのは明白である。そこで，菅江真澄が実見したであろう秋田万歳を，他の絵師の筆による図絵から，再現してみたい。そもそも，図絵から芸能研究に臨む，という発想自体は，前例のないものではない。たとえば，山東京伝は『骨董集』上編下巻において［山東 1976: 500］，坪内逍遥は『歌舞伎画証史話』において［坪内 1978: 378］，図絵から歌舞伎に取り組んだ。わけても，坪内逍遥は，歌舞伎を読み解くための，史料として芝居絵を，画証と呼称している。もとより，こうした画証的考察は，図絵が豊富に現存している，舞台芸において多用されがちであった。

あらためて万歳を顧みると，新年を寿ぐ芸能だけに，神楽や田楽に比べると，画題に選ばれやすかったとみえる。これらのうち，菅江真澄と同時代の成立であり，かつ万歳のなかでも秋田万歳である，という条件を満たすのは３点であった。すなわち，『秋田紀麗』『秋田風俗絵巻』『風俗問状答』であり，書誌事項は後述する。従来の研究では，秋田万歳の図示にさいして，いずれか１点の掲載が多く，３点の相互比

較は少なかったと思われる。

第一に，1804年序の，『羽陰風雅』の異名をもつ『秋田紀麗』を取り上げる。ここで紹介するのは，秋田県立図書館の所蔵資料のうち，１月２日条に添えられた図絵になる。著者は人見蕉雨であるが，図絵も人見蕉雨が手掛けたのか，また図絵に種本があったのかは，定論を聞かない。場面は，太夫と才蔵と覚しき２人組が，万歳を披露している最中である（図１）。２人とも素足で，太夫は扇子を差し出し，才蔵は鼓を打っている。衣装は不明瞭ながらも，太夫は侍烏帽子を被っているようであり，才蔵は大黒頭巾を被っていないように見受けられる。太夫の，左腕を裾に収めた恰好にも，留意したい。

第二に，近世後期成立の，『秋田風俗絵巻』を取り上げる。絵師の荻津勝孝は，1746年に生まれ1809年に没したため，この間の成立とみるのに疑いの余地はない。ここで紹介するのは，秋田県立博物館の所蔵資料のうち，正月年礼の一部になる。場面は，太夫と才蔵のほか，祝儀を入れる袋を背負う助手を加えた，３人組による門付けの道中である（図２）。太夫は，侍烏帽子に，鶴に若松の素襖，帯刀。才蔵は，縞模様の大黒頭巾に，渦巻模様の上衣，小袴。袋を背負う助手は，無地の頭巾および着物で，盛装とは認めにくい。太夫の，左腕を裾に収めた恰好にも，留意したい。

第三に，1814年跋の，『風俗問状答』を取り上げる。いわゆる諸国風俗問状に対する，秋田藩の回答であり，ここで紹介するのは，国立公文書館の内閣文庫本になる。著者は，那珂通博と淀川盛品とするのが伝統的学説ながら，図絵もこの両人の作とみるのか，定論を聞かない。場面は，太夫と才蔵のほか，祝儀を入れる袋を

図１　『秋田紀麗（部分）』秋田県立図書館所蔵
（人見蕉雨　1968.『人見蕉雨集』第４冊，秋田魁新報社，p.157）

図２　『秋田風俗絵巻（部分）』秋田県立博物館所蔵
（金森正也著；荻津勝孝画　2005.『「秋田風俗絵巻」を読む』無明舎出版，p.15）

図３　『風俗問状答（部分）』国立公文書館所蔵
（那珂通博，淀川盛品　1814.『風俗問状答』５，国立公文書館所蔵，請求番号：184-32-5，11丁裏-12丁表）

背負う助手を加えた，３人組が並んだところ（図３）。太夫は，侍烏帽子に，鶴に若松の素襖，小袴，白足袋，下駄。帯刀し，右手に扇子を握る。才蔵は，縞模様の大黒頭巾および上衣，小袴，白足袋，下駄。左手に鼓を持ち，右手で打つ。袋を背負う助手は，頬被りに，無地に近い着物，素足に草鞋で，盛装とは認めにくい。太夫の，両腕を裾に収めた恰好にも，留意したい。

上述に基づくと，近世後期における秋田万歳では，太夫と才蔵のほかに，袋を背負った助手を加えた，３人組を連想するのが普通であったらしい。もっとも，この第三の男は，真澄遊覧記など近世後期の文章には現われず，また近代以降の報告からも窺えない［市川 2000: 59］。三河万歳［安城市歴史博物館編 2008: 48］や尾張万歳［岡田，野口 1919: 130］の場合だと，祝儀を入れる袋を背負うのは，才蔵の役目になっていたと分かる。図絵の相互比較に関していえば，『秋田紀麗』では，第三の男が登場せず，『風俗問状』では，太夫を才蔵と説明しているのに，違和感を覚えよう。してみると，平均的なるものか否かという判断は，岩登りの三点支持のごとく，３点の確保によって実現できる，という一般論に通ずると思われる。

２．５　雪景色と安倍伝承

弘法大師の伝承などは，日本各地に分布するものだから，とうてい事実とは看做せない［柳田 1928b: 6］，というのが柳田国男の考えかたになる。ならば，特定の地域に，稠密に分布する伝承は，いかにして広められたのだろう。この回答としては，民間宗教者や民間芸能者などの，活動の痕跡であると概説するばかりで，それより深入りしない傾向にあった。こうしたなかで，阿部幹男論文は，奥羽地方にある安倍貞任や坂上田村麻呂の伝承が，奥浄瑠璃と結びつくと論証した［阿部 1989: 78; 阿部 2003: 96］，数少ない業績といえる。この阿部幹男論文は，奥浄瑠璃本から安倍伝承に向き合ったため，いかに安倍伝承が在地化したかという過程には，比重が置かれにくかった。

そこで，語りものを語ることが，伝承の在地化に，どのように関与したといえるか，真澄遊覧記から把握したい。そのために，後藤内則明が白川法皇に語ったという，武勇伝を参看しておく。武勇伝の冒頭は，源頼義軍が進軍するさいに，降雪に見舞われて甲冑を白色にした，という風景描写だったと，橘成季『古今著聞集』巻９は伝える。この武勇伝の信憑性や，先行研究に関しては，以前に整理したので繰り返さない［星野 2012a: 215］。叙上を前提として，『月の出羽路』仙北郡６にみえる，仙北郡蛭川村の姫神山伝説を引用したい。

……又頃は六月炎天なるに大雪を降せしによりて，義家の軍兵等働事を失ふ。義家の朝臣工夫をめくらし，柴をまげて藤にてあみ，あんじきとゆふものを調ふ〔今雪中人民用へ候かんぢき，これより始るよし。〕［菅江 1978: 230-231］

防戦する安倍宗任軍は，旧暦では晩夏にあたる６月に，大雪を降らせることで，源義家軍の攻撃を食い止めようとした。源義家は，防雪の道具を考案したが，これが今日のカンジキになった，という由来譚を兼ねる。この姫神山伝説は名高く，近年では阿部幹男論文も，俎上に載せていた［阿部 2011: 28］。本稿では，安倍宗任軍が天候を操るという，荒唐無稽が許容された根拠について，さらに追究したい。その根

拠も，菅江真澄が出羽国雄勝郡柳田村に滞在していたさいの日記である，『秋田のかりね』1785年10月19日条に収載されている。

其いはれは，あべのやからは神宮寺の淵とて，そこなきところにすむ，あやしのいろくず（魚）の子なれば，時しにあらぬ雪ふらせけるじち（術）も侍りけると，あやしのものがたりするは…［菅江 1973a: 216］

安倍一族は，怪魚の子孫であったから，降雪の妖術を心得ていたのだ，と説明している。1つの物語を合理化するために，その背後にある物語を合理化しなくてはならなくなる，平将門の鉄身伝承にも窺える構造といえる。

以上より，語りものを語ることが，伝承の在地化に，どのように関与したといえよう。第一として，後藤内則明の武勇伝と，在地の安倍伝承との，因果関係は不明ながらも，風景描写は一致していた。つまり第二として，語りものは舞台芸に比較して，場面を容易に転換できる，という特色の証左になっていると思われる。さらに第三として，在地の安倍伝承は，カンジキ譚に付会するなどして，より身近な問題に引きつけようとしている。かかる身近さは，語りものが一人称現在進行形に発するのに，遠因を尋ねられようが，これは戦災の記憶として，語り部を有効視する，理由でもあると考える。

おわりに

菅江真澄の見聞した祝福芸・語りものにつき，その梗概および論点を，明らかにしてみた。真澄遊覧記には，諸国を放浪する人たちが，糊口を得るために，披露する芸能つまり放浪芸が，いくつも記録されている。その記録は，詳密を極めるほどではないものの，かといって興味本位に走るわけではなく，また憐愍の感情を誘うわけでもない。しいて説明すれば，日常を生きる人たちに，節目や精彩をもたらす存在として，その豊かな意義を活写したといえよう。

このように，さりげなくも温かい筆致が，菅江真澄には，なぜ可能だったのだろう。第一に，菅江真澄の前半生が，旅芸人と係わりがあったとする［内田 1977: 26］，千葉徳爾説が挙げられる。第二に，菅江真澄の後半生が，旅芸人の境遇に似通っていたことが，挙げられる。第二の手掛かりとして，野上陳令『御学館文学日記』1825年10月23日条を掲載したい。この一節は，内田武志も翻刻しているが［菅江 1976: 662］，ここでは秋田県公文書館の混架資料から翻刻しておく。

菅江真澄，平鹿郡旧跡吟味被仰付，去年中罷越段々回村此節大略相片付，此程横手近在既ニ吟味成就仕候。去秋中出之砌，旅装御合力拝領被仰付，其後吟味形存之外延日ニ罷成，衣服零落内々如何共迷惑仕候。［野上 1825: 52］

菅江真澄自身も，みすぼらしい風体で，諸国を放浪していたと窺える，貴重な証言といえよう。菅江真澄は旅芸人とはいえないが，豪農層の邸宅を訪問するなどし，真澄遊覧記という才能を引き換えにして，寝食を獲得していたらしい。はやく今田洋三論文は，豪農が文人墨客を歓待していたと指摘しており［今田 1976: 233］，菅江真澄もこの例外に漏れなかったと考えられる。これを換言すると，第一次産業たる農漁業の余剰が，第三次産業たる文化活動に投資されていた，と看做すことができる。もっとも，こうした所得再分配機能を解明するには，

真澄遊覧記を素材とする真澄研究の範囲を，逸脱したものにならざるをえない。

〔投稿受理日2012.12.15／掲載決定日2013.1.24〕

参考文献

赤坂憲雄　1996.「春来る鬼」『白い国の詩』473，pp. 4-13
阿部幹男　1989.「論考「御領分神社仏閣縁起」構成と性格」『伝承文学研究』37，pp. 70-80
阿部幹男　2003.「盛岡南部藩の「田村語り」」『岩手県立博物館研究報告』20，pp. 96-76
阿部幹男　2011.「神宮寺嶽伝説と真澄」『真澄学』6，pp. 26-45
安城市歴史博物館編　1998.『三河万歳』安城市歴史博物館
安城市歴史博物館編　2008.『江戸っ子が見た三河万歳』安城市歴史博物館
石井忠行　1875.『伊頭園茶話』16，秋田県公文書館所蔵，資料番号：混架 8-699-16
石井正己　1987.「奥浄瑠璃と琵琶覚書」『山形の民話』100，pp. 22-32
石井正己　1988.「盲僧の早物語」『学芸国語国文学』22，pp. 18-29
磯沼重治　1998.「菅江真澄の伝承文芸への関心」『国学院雑誌』99(11)，pp. 114-127
市川捷護　2000.『回想日本の放浪芸』平凡社
井上隆明　1970.「秋田の芸能」『秋田の民謡・芸能・文芸』秋田魁新報社，pp. 109-181
内田武志　1970.『菅江真澄の旅と日記』未来社
内田武志　1977.『菅江真澄全集』別巻１，未来社
岡田啓，野口道直著；小田切春江画；原田幹校　1919.『尾張名所図会』中巻，大日本名所図会刊行会
小沢昭一　1974.『日本の放浪芸』番町書房
小野功竜　1975.「廻檀法要における琵琶」『琵琶その音楽の系譜』別冊解説書，日本コロムビア，pp. 30-34
折口信夫　1931.「春来る鬼」『旅と伝説』4(1)，pp. 2-11
折口信夫　1934.「秋田にのこる奇習」『秋田魁新報』１月６日，p. 2
金森正也著；荻津勝孝画　2005.『「秋田風俗絵巻」を読む』無明舎出版
鎌田幸男　1999.「男鹿のナマハゲ」『民具研究』120，pp. 23-31
菊岡沾凉　1974.「本朝世事談綺」『日本随筆大成』第２期12，吉川弘文館，pp. 417-541
小玉暁村　1934.「郷土芸術研究」『秋田郷土叢話』秋田県立図書館，pp. 558-565
小堀光夫　2010.「菅江真澄と民間説話」『真澄研究』14，pp. 29-62
小松和彦　1989.「簑着て笠着て来る者は……」『これは「民俗学」ではない』福武書店，pp. 185-224
今田洋三　1976.「幕末における農民と情報」『地方文化の伝統と創造』雄山閣，pp. 208-238
近藤源八著；井上隆明ほか翻刻；新秋田編集委員会編　1978.『新秋田叢書』第３期７，歴史図書社
斎藤寿胤　1988.「秋田万歳」『国文学』53(5)，pp. 41-45
佐々木喜善著；遠野市立博物館編　1986.『佐々木喜善全集』１，遠野市立博物館
佐々木孝二　1983.「東日流の語部伝承の形成」『日本文学』32(9)，pp. 11-21
佐々木孝二　1989.「近世北奥羽の語り」『国語国文研究』82，pp. 1-13
佐藤久治　1970.『秋田万歳』秋田真宗研究会
佐藤久治　1980.「真澄と秋田万歳」『出羽路』68・69，pp. 11-14
山東京伝　1976.「骨董集」『日本随筆大成』第１期15，吉川弘文館，pp. 337-555
新行和子　1982.「菅江真澄と尾張・三河」『教育愛知』30(2)，pp. 40-45
菅江真澄著；内田武志，宮本常一編；内田武志解題　1971a.『菅江真澄全集』第１巻，未来社
菅江真澄著；内田武志，宮本常一編；内田武志解題　1971b.『菅江真澄全集』第２巻，未来社
菅江真澄著；内田武志，宮本常一編；内田武志解題　1972.『菅江真澄全集』第３巻，未来社
菅江真澄著；内田武志，宮本常一編；内田武志解題　1973a.『菅江真澄全集』第４巻，未来社
菅江真澄著；内田武志，宮本常一編；内田武志解題　1973b.『菅江真澄全集』第９巻，未来社
菅江真澄著；内田武志，宮本常一編；内田武志解題　1974.『菅江真澄全集』第10巻，未来社
菅江真澄著；内田武志，宮本常一編；内田武志解題　1975.『菅江真澄全集』第５巻，未来社
菅江真澄著；内田武志，宮本常一編；内田武志解題　1976.『菅江真澄全集』第６巻，未来社

菅江真澄著; 内田武志，宮本常一編; 内田武志解題 1978.『菅江真澄全集』第７巻，未来社
菅江真澄著; 内田武志，宮本常一編; 内田武志解題 1979.『菅江真澄全集』第８巻，未来社
菅江真澄著; 内田武志，宮本常一編; 内田武志解題 1980.『菅江真澄全集』第11巻，未来社
菅江真澄著; 内田武志，宮本常一編; 内田武志解題 1981.『菅江真澄全集』第12巻，未来社
平辰彦　2005.「菅江真澄と秋田万歳の系譜」『秋田民俗』31，pp. 39-47
高木啓夫　1985.「四国西部の神楽について」『日本民俗学』161，pp. 1-14
高野辰之　1940.『日本歌謡史』再版，春秋社
田口昌樹　1994.「真澄の見た秋田の民俗」『秋田市史研究』３，pp. 43-63
坪内逍遥著; 逍遥協会編　1978.『逍遥選集』別冊第５，第一書房
長沢詠子　1972.「尾張の菅江真澄」『菅江真澄全集月報』３，pp. 3-5
那珂通博著; 平山敏治郎校　1969.「出羽国秋田領風俗問状答」『日本庶民生活史料集成』第９巻，三一書房，pp. 492-532
那珂通博，淀川盛品　1814.『風俗問状答』５，国立公文書館所蔵，請求番号: 184-32-5
中山太郎　1930.『日本巫女史』大岡山書店
中山太郎　1934.『日本盲人史』昭和書房
成田守　1985.『奥浄瑠璃の研究』桜楓社
野上陳令　1825.『御学館文学日記』２，秋田県公文書館所蔵，資料番号: 混架25-29-2
野村純一　1976.「菅江真澄の旅と物語」『伝統と現代』38，pp. 117-122
人見蕉雨著; 伊藤裕翻刻; 井上隆明編　1968.『人見蕉雨集』第４冊，秋田魁新報社
文化庁文化財保護部編　1986.『民俗資料選集』15，国土地理協会
文化庁文化財保護部編　1993.『民俗資料選集』21，国土地理協会
星野岳義　2012a.「安倍貞任または安倍宗任に関する伝承」『社学研論集』19，pp. 213-221
星野岳義　2012b.「菅江真澄の見聞した民俗芸能」『社学研論集』20，pp. 185-200
星野岳義　2013.「菅江真澄の見聞した民俗芸能」『ソシオサイエンス』19，pp. 126-141
本田安次　1990.『日本の伝統芸能』錦正社
本田安次　1993.「聞き書き民衆の魂求めて」『河北新報』６月17日朝刊，p. 15
松山修　2001.「記録された秋田の民俗芸能」『かなせのさと』27，p. 1
三田村佳子　2005.『里神楽ハンドブック』おうふう
三村泰臣　2003.「安芸と周防の「将軍舞」」『山岳修験』32，pp. 19-32
森山弘毅　1997.「鄙廼一曲注釈ノート」『釧路公立大学紀要』人文・自然科学研究９，pp. 1-34
八木洋行　2005.「地震と万歳楽」『真澄学』２，pp. 241-247
柳田国男　1928a.『雪国の春』岡書院
柳田国男　1928b.「木思石語」『旅と伝説』1(3)，pp. 2-14
山路興造　1988.「万歳の成立」『民俗芸能研究』８，pp. 1-19
渡辺伸夫　1988.「長崎県五島神楽資料」『演劇研究』12，pp. 269-363